

Internet world ネット時代に生きる

櫻井 哲朗

第14回

電子書籍

画面を自由自在に操れる 新しい読書のかたち魅力

みなさま、新年あけましておめでとうございます。昨年度は、この連載をお読み下さりありがとうございます。ありがとうございました。どうぞ、今年もよ

ろしくお願いいたします。みなさまのお陰でなんとか、この連載も年を越すことができました。なんと、年を2回も越すことができました

とつてはとも昔のようなイメージかと思えます。このような関係で、去年の総括を書くにもまだ情報が出そろうて

いないというのが現状です。それに、よく年末に大事件などが起こったりします。それに触れないのはとても不自然になってしまいましたので、去年のインターネット関連の総括は来月の記事に回したいと思います。

した。

えっ、そんなに長い間連載していたかなあと思いの方々もいらっしやるかと思えます。手の内を明かせば、連載スタートが一昨年の年末近くの月からだったためという、なんとも簡単な理由でした。同僚などに何年生まれと聞いて自分と同じ年代の生まれでタメ口でしゃべっていたら実は遅生まれで1年以上の先輩で、突然敬語で話すのも微妙な感じでした。まあ、この例え自体が微妙な感じですね。

去年の総括は次号に

みなさまがこれを目にするのは年明けなのですが、執筆しているのは年末にすらなっていない12月上旬です。そのため、いまのところ「おもてなしの倍返し、いつ

やるの今でしょ、
じえじえじえ」ぐらいしか言えないです。たぶん、これも記事を読まれているみなさまに

いまさらの話題ですが新年になると子供と大人では違うものの1つとしてお年玉があります。大人でも貰える場合もありますが、残念なことにはほとんど貰えないですね。ほんと、残念無念です。

お年玉の相場確認

では、そんなあげる場合がほとんどのお年玉、ついつい自分ももらっていたころと同じぐらいの金額を渡してしまいがちです。それも小さかった子供のころよりお金の額に現実感がともなってきた中学生や高校生のころのイメージが強く、ついつい多く渡しすぎているかもしれません。

そんな世代交代によるお年玉インフレスパイラルを回避するためにもお年玉の相場をここであらためて確認しましょう。もう遅いですが。レッツユーザー調べによる2014年お年玉相場調べによ

る調査結果が表1になります。またそれを図にしたものが図1になります。

小学生は3千円未満

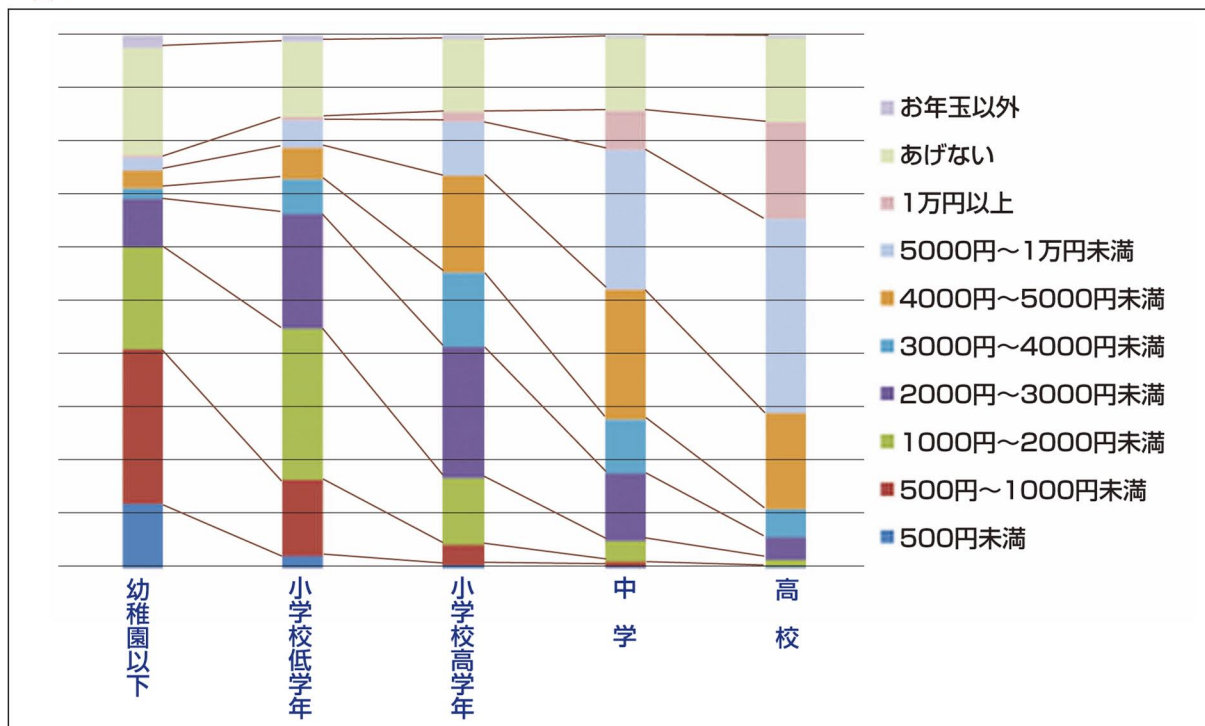
最も数字が高いところをお年玉

市場の適正価格だと考えると幼稚園では5000円から10000円未満ということから、たぶん5000円硬貨でプレミアム感を演出することで喜んでもらえると思います。また小学校低学年では10000円から20000円未満ということ、小学生になることでお年玉が硬貨から紙幣にランクアップして高級感を演出して大丈夫かと思えます。

高校生になると、ある程度の金額となり、5000円から1万円未満がどうやら相場となるようです。ぜひ、このお年玉相場を活用して来年は適正なお年玉をあげて、ぜひとも両手で口から鼻まで覆って「うわっ：私のお年玉、低すぎ：」とかラインに流されないうようにしたいと思います。こんなことされたら結構、へこみますからね。

表1	500円未満	1000円～5000円未満	2000円～10000円未満	3000円～20000円未満	4000円～30000円未満	5000円～40000円未満	1万円未満	1万円以上	あげない	お年玉以外
幼稚園以下	12.1	29.1	19.1	9.1	2.1	3.3	2.4	0.4	20.3	2.1
小学校低学年	2.3	14.4	28.2	21.7	6.6	5.9	5.1	0.7	14.2	1.0
小学校高学年	0.6	3.7	12.7	24.6	13.9	18.3	10.1	1.9	13.7	0.6
中学	0.3	0.9	3.9	12.7	10.2	24.3	26.2	7.6	13.7	0.2
高校	0.2	0.2	1.2	4.2	5.3	17.9	36.6	18.2	16.0	0.2

図1



市場の適正価格だと考えると幼稚園では5000円から10000円未満ということから、たぶん5000円硬貨でプレミアム感を演出することで喜んでもらえると思います。また小学校低学年では10000円から20000円未満ということ、小学生になることでお年玉が硬貨から紙幣にランクアップして高級感を演出して大丈夫かと思えます。

高校生になると、ある程度の金額となり、5000円から1万円未満がどうやら相場となるようです。ぜひ、このお年玉相場を活用して来年は適正なお年玉をあげて、ぜひとも両手で口から鼻まで覆って「うわっ：私のお年玉、低すぎ：」とかラインに流されないうようにしたいと思います。こんなことされたら結構、へこみますからね。

データの種明かしは

ちなみに、この表や図を見てもらうと、年が上がるにつれて金額も増えているのが見て取れるかと思えます。経験的にまたは直感的に思われてきたお年玉と年齢の関係がデータから証明することができます。まあ、種明かしをしますと、そう言えそうだったから、このような数字と図を用意したともいえます。ちょっとした卵が先か鶏が先かの問題になってしまいましたが、データ分析はこのような検証と探索を繰り返し行って新しいことを発見しようとしています。そんなデータ分析についても近いうちに扱いたいと思います。今日のテーマは電子書籍です。いままでの話とまったく関係ないで

すが、無理矢理つなげるなら自分自身へのお年玉として電子書籍というデジタルギアはいかががでしょうか。

電子書籍とは

最近よく「Kindle」のCMを見かけるようになりました。あのオシャレ感を前面に出したCMです。

このCMを見るたびに、ちょっとよく分からない感情にとらわれるのは僕だけでしょうか。最近のコンピュータ関連のCMを見ると利便性ではなくアップルのCMのようにオシャレ感を演出するのが多くなったような気がします。

もしかしたら前からそうだったのかもしれませんが……。やはり大衆に受け入れられるためには利便性よりもかっこよさの方が大事なのかもしれません。またまた話題がずれてしまいました。でもそもそも電子書籍とはなんなのかについて、ここでは考えてみたいと思います。

専用「Kindle」なぞ

電子書籍とは、簡単にいいますと紙の代わりにディスプレイに文字を映したものです。ものすごく、ざっくり言ってしまいましたので

補足します。ここでは書籍を1つの情報としてとらえて、いままではその情報を紙に印刷して提供してきました。現在では、技術が発達し紙以外の媒体でも書籍情報を取り扱えるようになり、それを電子的に取り扱ったものが電子書籍と呼ばれています。

とくに、最近ではスマートフォンやタブレットPCで読む書籍のことを電子書籍と呼ぶことが多いように思えます。ここで重要になってくるのが、この情報を映し出す端末になります。現在、電子書籍の専用端末として、どのようなものがあるか紹介させていただきます。インターネット販売会社であるところのAmazonが製造・販売している「Kindle」や、ネットショッピングなどのインターネットを使った総合サービスを展開している楽天が販売している「Kobo touch」、家電メーカーであるところのシャープが展開している電子書籍配信サービスおよびその端末である「GALLAPAGOS（ガラパゴス）」などがあります。

スマホも活用される

また、専用端末以外にもパソコン

ンや、みなさんがお持ちの携帯電話やスマートフォンも1つの電子書籍の端末であるということが出来ます。このようなことから、もう既に電子書籍を身近に読める環境にあると

いうことが出来ます。今後、携帯電話やスマートフォンの進化やパソコンの小型軽量化またはタブレットPCの普及により、どんどん電子書籍に触れる機会が増えてくると思います。

実際、仕事以外の普段の生活ではパソコンの使用は限定的で、インターネットの接続やちょっとした短いメールを打つといったくらいでないかと思えます。つまり、インターネットに繋がることとちよつとした文章を打てる機能があればことが足りるため、そうなるにキーボードを排除したタブレットPCやスマートフォンなどが普



及していくと考えられます。そのとき、1つのコンテンツとして電子書籍が今よりも活用されるでしょう。

電子書籍の利便性

さきほど、書籍を情報として捉え、それを電子的に扱ったのが電子書籍であるという話をしました。現在、電子書籍がたいへん普及しているというイメージはないと思

います。まだまだ書店があり、ここに行けば紙に印刷された書籍が山積みされ毎週毎月のように新刊が出続けています。それは、なぜなのでしょう。

通常、ソフトウェアとそれを扱う端末つまりハードウェアの親和性が高いことによってはじめて利便性などの利益が生まれてきます。とくに紙と文字情報の親和性が高く、あまり電子書籍が普及してい

ないのも、機能上位にもかかわらず、利便性を含む形での親和性がないためと著者は考えています。では電子書籍に意味がないかというところなことではなく、紙にはない良さがあります。ここでは、電子書籍が持つ魅力について考えていきたいと思っています。

紙時代と同じ機能

赤線や折り曲げは

みなさん、本を読むときに何か目印になるものをつけたり使ったりしますか。例えば、小説など連続性のある情報を読むときには前回どこまで読んだかを記録するために本にしおりをはさんだりすると思います。または、雑誌を読んでいる気になったお店や商品などの記事を後で見つけられるように本の上のところをちよつと折り曲げた

りする方もいるかと思えます。このことをドッグイアと呼ぶそうです。犬のたれた耳のようなさまからこのような名前がついたそうです。あとは、気になったところにダイレクトに赤で線を書き込んだり、または新聞や雑誌などを切り取ったりする方もいるかと思えます。

記憶や索引を瞬時に

これらの行為は、どれも情報の記録という点で一致しています。あとから見返したときにすぐに発見できるようにしたいということから行われます。

電子書籍なら、この記憶するという点においても優れています。たとえば、しおりの機能なら電子書籍を起動した瞬間に前回読んだところを表示してくれます。また、気になったところや気に入ったところの記事や文章なら、そこをハイライトして記憶し、あとのハイライト一覧からたどることができたりします。

また、それらの記憶にプラスαで時間軸を付属して記憶してくれる機能もあります。たとえば、何日まででここまで読んだといった

情報を保存してくれます。そこから、同じ分量の書籍を読むときに予想読了時間などを予測してくれる機能も付属している場合もあります。そういった意味で記憶およびその管理においては、電子書籍は非常に便利です。

紙時代を超える機能

本棚はいりません

いままでよりもたくさん量を手軽に読める、これも電子書籍の特徴の1つです。電子書籍では書籍情報が電子化されるため今まで以上に取り扱いが楽になります。いままで、持ち運べる本の数などたかだかしかれていました。せいぜい、5、6冊ぐらい、文庫本など小さい本なら10冊ぐらいでしょう。そのため、所持している本を管理するために本棚を用意し、それで足りなくなればまた本棚を、そしてゆくゆくは書斎を作っていくとなります。もちろん個人での所蔵では全ての本をそろえるのは不可能ですから、そのため図書館などの公共施設があります。

DVD大で4千冊も

このような具合に紙媒体では、

どうしても保管する場所という問題が切っても切り離せませんでした。ですが、電子書籍ならそれを解決することができます。たとえば、Amazonが販売しています「Kindle Paperwhite」なら、DVDのパッケージぐらいの大きさで一般書籍などが約4000冊を所持できるそうです。これがどれくらい冊数なのか比較するために文科省で定められている小学校にある学校図書館図書標準が1学年3クラスとした場合、約1万冊にあたりますので、「Kindle Paperwhite」1つでその3分の1をカバーすることができます。

調査や検索にも対応

さらに、電子書籍なら辞書内蔵機能やインターネット接続機能により、わからない単語などが出てきたときにすぐに調べることができます。とくに、外国語の本や難解な本、専門書を読むときにはとても便利な機能です。

これは電子書籍の保存形態であるところのフォーマットによるのですが、画像ではなく文字として保存されていれば文字列を検索することができ、通常はうしろに索

引がある場合にはそこからたどらなければならぬ作業を一瞬で行うことができます。この機能は、たとえば専門書などを読む際にとっても便利で著者自身もよく多用しています。今後、ある単語を内蔵されている辞書全て一括して検索できる「串刺し検索」などの機能が充実していけば、より使いやすくなってくると思います。

いままでにない体験 動画や音楽を盛り込む

それは、まず図2のように動画や音楽を盛り込めることです。これは紙の媒体では無理なことですね。もちろん、そんなのは不要であるという意見もあると思います。ですが、情報伝達の方法の幅が広がる新たな表現の仕方ができるようになるかもしれないので面白い機能だと思えます。例えば、小説において悲しい場面ではシックな音楽を、楽しい場面ではポップな音楽を流すことにより、より小説の世界にのめり込めるようになるかと思えます。

ビジネス書や学術書において今まで解説が難しかった図版による説明も動画にすることによって時

間という新たな軸が加わり3次元的な奥行きを持ったような表現が可能になるので理解の助けになるかと考えられます。実際、

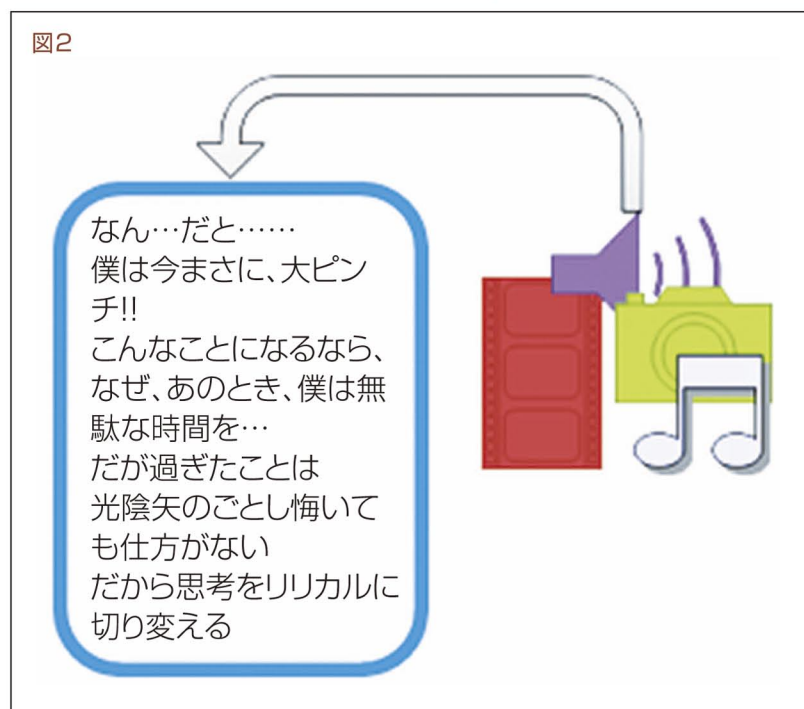
簡単なところではマンガのセリフに音声をあてたり、マンガのコマのセリフを揺らしたり拡大して動きをつけたりすることで今まで読んだことがあるマンガも新鮮な感じで見ることができ

「双方向」的な要素も

最近では、これにインタラクティブ的な動きも加わりつつあるようです。かつこよく横文字で言うてみましたがインタラクティブつまりは「対話」や「双方向」的な要素です。実際に本と対話できた

ら面白いと思いませんか。まあ、さすがにそれは人工知能的な事柄も含んできそうなので、まだ実現

図2



は難しいですが、たとえば図に3D画像を埋め込んでおき、好きな角度で見ることができるようになったり、教科書などにある問題を解くとマル付けをしてくれたりといった機能が考えられます。

いままでにない変化

制作コストの軽減

以上、電子書籍が優れている側面を機能面に焦点を当てて説明い

たしました。最後に、それ以外の側面について考えていきたいと思っています。まずは流通面について触れていきたいと思えます。通常、紙媒体で書籍を流通させるためにはどうしても印刷コストというものがかかってしまいます。ですが、電子書籍ならこのコストをゼロにすることができず。

実際には、通信コストやもともと紙媒体で印刷されていたものを流通させるのであればそれを電子化するコストなどがかかってくるので、厳密にはゼロとは言えません。まあタダほど高い物はないとか、思い出はプライスレスとかとは違う意味でコストはかかりますが紙媒体のコストと比べれば比較的コントロール可能な部分が多いです。

絶版発行など柔軟に

先ほども触れましたが電子化の強みとして場所を必要としません。そのため在庫を管理するといったコストも考えなくてすみます。このようなことから、出版社側として採算が見込めなくやむなく絶版としてしまった書籍を電子書籍化することにより再版することがで

きます。

販売数が見込めないいわゆるマニアックなまたはとても専門的な書籍も出版することができず。このようなことは学術分野などで多く、良書だが絶版になってしまった本が数多くあります。中には研究するためにはどうしても必要となり古書街を歩き回ってようやく手に入れることもあります。電子書籍なら、これらの問題を解決してくれそうです。

これ以外にも誤字や脱字の訂正も版を変えるのではなくアップデートという形をとれば、また新しい版の書籍を購入せずとも修正または改訂することができます。これも紙の書籍では、古い版を売り切らなければ新しい版を刷ることが

できないといった経済的な問題を解決してくれそうです。これも、電子書籍ならではのメリットです。

デメリットもあり 手軽さはまだまだ

このように優れどころばかりの電子書籍。では、なぜ紙の書籍がいまだに主流なのでしょう。それは、やはりまだまだ紙の書籍の手軽さ読みやすさには追いついていないというのが現実です。これは著者自身の経験ですが、紙の書籍ならばばらめくって何となく見るといった行為ができます。それに机の上に複数の書籍を置いて、それらを平行して見るといった行為など、やはり紙媒体でないといえないことがまだまだ多いと言えます。

情報格差を生む課題

また電子書籍には社会的・経済的な問題もあります。それは、もし仮に電子書籍が普及し紙の書籍がなくなってしまう場合、電子書籍の端末を持たない人は本に接する機会を失ってしまうこととなります。このような格差のことを情報格差またはデジタル・デバイ

イドなどと呼びます。やはり、電子書籍の端末やそれ取得するためのインターネット環境など紙の書籍に比べると初期費用が格段に上がります。そのため、情報格差をなくすための社会的な仕組みも必要になってきます。

また、電子書籍のみによって本の販売が行われるようになれば、いわゆる街にある本屋さんで売る本がなくなってしまう。そうしなければ本屋さんを続けていくことができず。これは電子書籍だけでなくインターネットショッピング全体において非常に重要な問題となつていきます。やはり技術の革新は社会構造を大きく変化させる要因となり得るので、そこで生活している人たちに対してどのような社会保障をしていくかが重要となってきます。もしも自分自身が職を失う立場になったら、それはものすごい恐怖でしかありません。突然、シリアスな話になつてしまいました。が今後ほとんど便利になつていくことが予想される電子書籍から目が離せません……と大掃除で片付けなければならぬ本を山を見ながら虚ろな目で現実から目をそらす筆者です。

さくらいてつろう

中央大学大学院理工学研究科を卒業し、専攻は統計学。コンピュータなどによって計測される大量のデータをまとめる多変量解析の研究。現在は、諏訪東京理科大学共通教育センター講師。東京都出身、30歳。